

教育センター・ニュース

Education Center, Tottori University

NEWSLETTER No. 9

第 9 号 2012 年 7 月 1 日発行

目 次

- ・全体の活動（新入生学習相談会/ ふれあい朝食会学習相談）----- 1
- ・教育開発部門（大学教育研究フォーラム参加/ 第60回中国・四国地区大学教育研究会参加/
新任教員FD研修会）----- 1～3
- ・外国語部門（教育改善プロジェクト報告書刊行/ 教養基礎科目（英語）開講 /
第1回 TOEIC 試験実施（1年生対象）/ プロジェクト成果報告会 ----- 3～4
- ・健康スポーツ部門（スキー実習/ トレーニングルームの使用法説明会/ 附属学校園における教育支援活動/
第60回中国・四国地区大学教育研究会参加） ----- 4
- ・教職教育部門（教員免許状更新講習/ 鳥取県教育センター長期研修生/ 「教職ポートフォリオ」の運営/
介護等体験オリエンテーション/ 「教職実践演習」の授業開発に向けたプロジェクト/
教育臨床相談/地域貢献/教育研究論集）----- 4～5
- ・関係教員名簿

全体の活動

● 新入生学習相談会

新入生対象の「学習相談会」を4月4日（水）に終日開設しました。教養科目等の抽選マークシートの提出締切日であったこともあり、鳥取地区新入生の約27%に相当する288名から相談がありました。相談内容は履修表の記入方法（50.7%）、教養科目の履修方法（50.2%）、教職科目の履修方法（16.4%）についての相談が多く見られました。また、学部別相談者数では医学部の相談者が多く見られ（46.4%）、次に多い地域学部（約27%）をかなり上回っています。



● ふれあい朝食会学習相談

4月10日（火）～16日（月）に実施された「ふれあい朝食会」において、全期間にわたり「学習相談コーナー」を開設しました。毎朝、常時2～3名の教育センター教員が特設ブースに待機し、学生の相談に応じました。期間中、相談件数は14件、相談者は18名でした。相談内容は講義関連（教養科目、外国語など）、課外活動関連（サークルなど）、学内施設関連（講義室の位置など）など多様な内容についての相談でした。



教育開発部門の活動

●第18回大学教育研究フォーラム参加

平成24年3月15日(木)～16日(金)に、京都大学吉田キャンパス(京都市・左京区)で行われた、第18回大学教育研究フォーラムに参加しました。

第1日目(3月15日)の午前中は、個人発表と小講演が行われ、「FD・授業公開研究部」は4件の発表がありました。城間祥子氏ほか愛媛大学グループは、FD研修ニーズの個人への調査結果として、「学習理論」と「学生のモチベーション向上」へのニーズが特に高いということを報告しましたが、これは、鳥大での研修会テーマを決めるのに示唆的です。榊原暢久氏ほかの芝浦工業大グループからは、米国型シラバス(学生が毎回参照する6～10頁以上の冊子型)の書き方ワークショップの事例報告がありました。小講演(1)では、京都大学の西岡加名恵氏の、教員免許取得をめざす学生の評価のため、ポートフォリオを書かせる「ポートフォリオ評価」の実践事例報告は、椅子が足りないほど聴衆者が多く全国の大学の関心の高さを示すものでした。

午後は、京都大学の田中毎実氏の「相互研修方FDの総括」という基調講演と、それに対する6人のパネラーによるディスカッションが4時間以上かけて行われました。伝達講習型ではなく相互学習に基づくFD活動を、個人・地域・国内・国際レベルで行ってきたという田中氏(田中氏は京都大学高等教育研究開発推進センター長を退官のため本年度で退く)の「総括」に対して、6人のパネラーが、レベルごとの視点から批判・賛同する意見を述べました。フロアからも活発な意見が出ました。

第2日目(3月16日)の午前中、個人発表コーナーでは、前日に続いて、「FD・授業公開研究部会」に参加しました。4件の発表のうち、三重中京大学の清水亮氏の「崖っぷち大学(実は平成24年度で閉校が決まったという)」での授業改善実践報告では、パワー・ポイントを使えるようになるために学生たちが自分達で学びあう事例の報告が、印象に残りました。立命館大学の木野茂氏の講演は、全国の学生をこれまで3年間に亘って学生発信型FD(=学生FD)に組織した学生サミットの報告でしたが、(なかなか

真似のできない)学生間ネットワーク作りの大きな成果でした。続く、小講演では、東京大学・小方直幸氏の「学習する学生と学習させる教員」の報告は、「学習させるには、授業方法とともに内容も重要であり、学生の職業(その選択)にどう繋がるかを学生自身に予想させるような提示の仕方が重要である」といったオーソドックスな内容の報告でした。

全体として、全国の大学改善の動きもルーチン化の段階を迎えた印象でした。

●中国・四国地区大学教育研究会への参加報告

平成24年6月2日(土)～3日(日)の2日間にわたって広島大学総合科学部(東広島市)で開催された、第60回中国・四国地区大学教育研究会に参加しました。

第1日目(6月2日)の午後、まず、大学教育学会会長の小笠原正明氏が「開放系としての教養教育」と題する基調講演を行い、戦後の大学学制史と本研究会の歩みを顧みて、科学の「相対化」が教養教育の使命である、と結論づけました。続いて、シンポジウムが行われました。趣旨説明のあと、第一部で、池田輝政氏(名城大学)が「教育における協働の質を向上させるには」と題して、「協働」の意義や質を名城大学での取り組みを報告しました。それを受けて、秦(はた)敬治氏(愛媛大学)が「教員・職員・学生による大学教育プログラムの実践」と題して、課外活動での学生リーダーの育成事例を、「愛媛大学リーダーズ・スクール(ELS)」の活動を通して報告しました。三人目の講演は、事務職員である友松修氏(広島経済大学・興動館課長)が、正規科目を受講させ地域の活動に参加させることで、「社会で力を発揮し、未来を切り拓く」人材として学生を育成するというプログラムの実践例を報告しました。第二部では、上記3名の報告者に愛媛大学・広島経済大学の学生各1名を加えて、5名で討議がなされ、フロアからも熱心な質問が出ました。

さまざまな教育プロジェクトを通して、教員・職員・学生の三者が「協働」する一つの事例を見せてくれたシンポジウムでした。

第2日目(6月3日)の午前中に行われた分科会で、報告者は、「人文・社会分科会」に参加しました。まず、浦光博氏(広島大学)が「大人

教授業での工夫」と題して、自らの「心理学」の授業での、講義環境や講義内容での工夫（例：私語への対処法、テーマを昨今の出来事と結びつける等）を報告しました。続いて、高橋憲雄氏（広島大学）が「ともに考える授業」と題して、哲学・倫理学の講義での学生の自発的な思考を促す試み（例：試論的回答の提示とそれの批判的吟味への誘導、単純化・イメージ化・図式化の導入とそれの反省への促し等）を報告しました。フロアーからも報告者への質問、自らの工夫の披露など、活発な討論がなされました。どの大学の人文・社会系教員もそれぞれの立場でさまざまな工夫や試みを実践している、ことが改めて確認できました。

● 平成24年度 新任教員FD研修会

6月8日（金）15時より、共通教育棟第1会議室において、新任教員FD研修会を実施しました。研修に参加された新任の教員は、計16名（内訳は地域学部1名、医学部2名、工学研究科7名、農学部3名、乾燥地研究センター1名、産学・地域連携推進機構1名、工学部ものづくり教育実践センター1名）でした。

本名教育担当理事が、開会挨拶の後、大学の現状について説明されました。参加者間のアイスブレイキングに続いて、田畑教授が「授業スキルの基本と授業改善のための工夫」についてレクチャーを行いました。「どうしたら良い授業が創出できるか」をディスカッションしてもらい、3つのグループの代表者に、話し合いで出た意見をまとめ発表してもらいました。

その後、教育開発部門の桐山准教授が「FDの意義」と題し、文科省の一連の大学政策、FDに関する考え方などについてレクチャーを行いました。

休憩を挟んで、工学研究科（センター兼任）の吉野准教授が「専門科目の授業実践と改善例」と題して、教える学生を理解し、独りよがりにならないためにはどうすべきか、就職先からはどんな学生が求められているか、覚える力とともに考える力をどうつけさせるか、といった点について、レクチャーを行いました。これに関連して、再びグループごとに話し合ってもらい、出た意見を代表者に発表してもらいました。

最後に、教育センター外国語部門の武田（修）

教授が、PRも兼ねて、現在進行中の「ビデオ録画による授業改善」の事例報告を行いました。

大学の「授業力」アップのため、主催者側としても、参加者の意見を参考にしてさらに有意義な研修会を開催していく必要がある、と考えています。



外国語部門の活動

● 教育改善プロジェクト報告書刊行

平成23年度の学長経費による教育改善プロジェクト『学力差に応じたTOEIC強化クラスの設定とその効果の検証（第2部）』の報告書が完成し、冊子で3月末に刊行しました。このプロジェクトは、平成22年度の同名のプロジェクトを拡充・継続したもので、英語力の高い学生を対象に更なる英語力アップを目指したものです。具体的には湖山キャンパスの3学部のそれぞれの英語最上位クラス（農学部は2番目のクラス）の学生（95名）に、学長経費で購入したTOEIC対策用テキストを貸与して、総合英語I（前期）、総合英語II（後期）の授業内外で受験指導を行いました。結果は、95名中25名が600点をクリアし、もとの5名から5倍に増加しています。TOEIC受験指導の効果の現れであり、今後の新たな取り組みへの参考になると期待されています。

● 教養基礎科目（英語）開講

新入生向けに開講される教養基礎科目（英語：基礎学力に不安のある学生を対象）が今年度も開講され、その第1回の講義（オリエンテーション）が4月19日に行われました。

今年新たに鳥取県立青谷高等学校の岡本尚也教諭を講師として迎え、前任の講師とは異なる授業展開が期待されます。この講義は岡本尚也講師の1回の講義（木曜日）に対して（TA担当の）、1回の補習が翌日の金曜日に組まれており、学生たちは最終日の7月20日まで、合計20回

の授業を通して不得意科目の克服に努めます。

● 第1回 TOEIC 試験実施（1年生対象）

1年生全員を対象とした、第1回 TOEIC 試験を5月26日（土）に行いました。午前中は工学部、午後は地域学部、農学部及び医学部の3学部の学生が初めての TOEIC 試験に挑みました。入学してから2か月弱という短い準備期間での受験は、学生にとっては不安に満ちたものです。しかし、過去の例から見ても、半年後に行われる第2回の受験に向けて、貴重な経験になることは間違いありません。さらに、後期に開講される実践英語のクラス分けのデータとしても利用されるので、この試験結果は学生達にとって重要な意味を持ちます。学生のみならず、教員からも、より良い TOEIC 試験成績が返ってくるのが期待されています。

● プロジェクト成果報告会

6月13日（水）に平成23年度学長経費成果報告会（第1回）が開催されました。今年から始まった新たな試みで、7月にも第2回目が予定されています。大学教育支援機構からは、外国語部門（英語）の教育改善プロジェクト『学力差に応じた TOEIC 強化クラスの設定とその効果の検証（第2部）』に報告の要請があり、プロジェクトの代表者である筏津教授がプロジェクトの概要、成果、そして今後の展望について報告しました。

報告に対して、能勢学長及び本名理事から成果に対する質問や今後への期待が述べられ、今年度の新プロジェクトを実施するにあたって、決意を新たにしました。

健康スポーツ部門の活動

● スキー実習の実施

平成24年2月20日（月）～23日（木）の日程で、平成23年度スキー実習を大山ホワイトリゾートで実施しました。実習には25名の学生が参加し、豊富な積雪と連日の晴天に恵まれ、絶好のコンディションの中での開催となりました。

スキー実習では初めて、クロスカンリースキーによる雪原散策を行い、グレンデスキーとは違ったスキーの魅力を学生に伝えました。



● トレーニングルームの使用法説明会

平成24年度の第1回、第2回のトレーニングルーム使用説明会を5月8日（火）、5月10日（木）に開催しました。

● 附属学校園における教育支援活動

今年で4回目の開設となる、附属小学校低学年児童を対象とした「キッズスポーツ アンド スタディサポート春季コース」を5月16日（水）に開始しました。7月4日（水）が最終回です。また、高学年児童を対象とした「陸上教室」を5月9日（水）に開始しました。最終回は9月5日（水）の予定です。

● 第60回中国・四国地区大学教育研究会参加

6月3日（日）に開催の保健体育分科会に出席しました。集中講義形式で実施されている野外運動種目の実施状況、意義、検討課題などについて討議するため、広島大学と広島修道大学より実践事例が報告されました。どの実習も1単位修得のための実習のため、日程は似通っていました。また、最近スポーツ愛好者の2極化が指摘されています。大学の实習においても、いろいろな実習に度々参加するリピーターの存在が指摘されました。これらのリピーターの満足度を上げるための方途について議論されました。

スキー実習参加希望者の減少傾向の克服のため実習地を長野から北海道に変更しましたが、有効ではなかったという報告もありました。最後に、検討課題でいろいろな点が指摘されました。

座学や通常の体育実技と異なる特性をもつ野外活動の意義を各方面に、いかにアピールしていくかが最重要の課題とされました。

教職教育部門の活動

● 教員免許状更新講習の開講

4月18日（水）に、教員免許状更新講習2012年

度受講申込みの受付を開始しました。

平成 24 年度の開講は、必修 4 講座・選択 58 講座で、順調に申込みを受付けています。

● 鳥取県教育センター長期研修生

現職教員研修による学部授業の聴講があり、前期授業について、7 名（授業数 10 回）の聴講受入れ調整をしました。（担当：柿内）

● 「教職ポートフォリオ」の運営

学生のフォローとして、5 月 16 日(水)～31 日(木)に、教員免許状取得希望学生（2 年次生および 3 年次生の一部、205 名程度）を対象にポートフォリオの個別チェックを行いました。

（担当：柿内）

● 介護等体験オリエンテーションの実施

4 月 12 日(木)に、地域学部・工学部 2 年次生、農学部 3 年次生を対象に実施しました（参加者 96 人）。

（担当：小林(勝)）

● 「教職実践演習」の授業開発に向けたプロジェクト（学長経費）

1 月 16 日(月)に、教員養成に関わる聞き取り調査（グループインタビュー）を行いました。

（担当：大谷、小椋）

2 月 7 日(火)に、平成 23 年度第 6 回ワーキングを開催し、4 年次後期教職必修科目「教職実践演習」（平成 25 年度開講）の授業開発の具体的検討および教職関連科目の履修歴調査の検討を行いました。（プロジェクト代表：柿内）

● 教育臨床相談

- ・個別療育（火・水曜日午後 4 時から）
発達障害のある小学生を毎月 1～2 名。
- ・外来相談 17 件(親子関係、友達関係、性非行、不登校、発達障害)、コンサルテーション 2 件、個別移行支援計画作成コーディネーター 1 件

- ・週 2 回のペースで事例検討会への参加

啓発活動等（「発達保障」学習会チュータ、鳥取県地域定着支援センター連絡会アドバイザー、鳥取県高等学校発達障害支援モデル事業研究発表会助言者、附属小学校おやじの会コーディネーター、「臨床発達心理士」資格認定筆記試験外部評価委員審査（東京）、臨床発達心理士資格認定委員会（東京）、兵庫県社会福祉士ファーストステップ研修検討委員会、鳥取県臨床心理研究会研修「心理職の国家資格をめぐる動向」等）

- ・附属学校への協力

附属小学校保護者面談、附属中学校個別相談、附属特別支援学校保護者相談・本人面談、附属特別支援学校コンサルテーション、附属小学校スーパーバイズ、附属中学校スーパーバイズ、附属小学校ピアサポート活動助言者、附属中学校 1 年生全員にエゴグラム(性格検査)を実施。

- ・震災支援

「日本発達障害ネットワーク」より派遣を受け、5 月 15 日(火)から 19 日(土)まで福島県相馬市を中心に専門家支援ボランティアを行いました。

（担当：小林(勝)）

● 地域貢献

3 月 10 日(土)に大学開放事業「遊びのまなび舎～逆転時間」を開催しました（参加者 25 名）。

（担当：大谷）

● その他

3 月 15 日(木)に「教育研究論集」第 2 号を発行しました。

教育センター関係教員（○は部門長、*は兼務教員）

センター長：本名俊正

教育開発部門：○田畑博敏、吉野 公*、橋本隆司、後藤和雄、井上順子、永松利文、桐山 聡、武田元有

外国語部門：○後津成一、福安勝則、武田修志、サージャント・トレバー、松本雅弘、和田綾子、小林昌博、
リン・シャーリー

健康スポーツ部門：○福元和行、上野耕平

教職教育部門：○塩野谷斉*、小林勝年、柿内真紀、大谷直史

※ 外国語部門、健康スポーツ部門、学生生活支援部門、附属学校連携部門の兼務教員は割愛しています。



編集・発行 鳥取大学教育センター広報誌編集委員会

電話：0857-31-5795（内線2485）

E-mail: st-soumu@adm.tottori-u.ac.jp